

時間と無

—— 田辺にとって絶対無とは何であったか ——

【発表要旨】

2019年7月21日

西田哲学会第17回年次大会

於 鎌倉女子大学

竹花洋佑 (大谷大学)

西田幾多郎にとってと同様に、田辺元にとっても絶対無はその思想の根幹にかかわる概念であった。後期の西田において絶対無の概念が次第に目立たなくなるのとは対照的に、田辺においては最晩年に至るまで絶対無はその哲学の中心概念であり続けた。その限りにおいて、田辺は西田以上に絶対無の哲学者であったといえることができる。

しかし、そもそも田辺は、西田の絶対無という発想に哲学の存立可能性を掘り崩す危険性を察知し、それを哲学の究極概念とすることに強い否定感を持っていた（「西田先生の教を仰ぐ」〔1930年〕）。その田辺がなぜ、絶対無に哲学そのものの可能性を託すことになったのか。そして、なぜその立場は思想の激しい変転を繰り返す田辺において最後まで堅持されることになったのか。この問題を解く鍵は時間の問題にあると考えられる。すなわち、絶対無という概念が田辺に受容されたのも、そしてそれが以降の田辺哲学を貫く鍵語であり得たのも、時間の問いを抜きにして哲学を語ることはできないという田辺の洞察に基づくものであり、その洞察が田辺に絶対無という概念の必要性を訴えたのである。そこで、本発表においては、田辺哲学における絶対無概念の受容とその理解の変遷を時間論の観点から明らかにすることを試みる。

絶対無という発想が田辺の哲学に位置づく決定的な機縁となったものは、西田が田辺の批判を強く意識しつつ打ち出した「永遠の今の自己限定」という思想である。そこでまずは、『ヘーゲル哲学と弁証法』（1932年）での議論を中心に、この思想が田辺に取り入れられた経緯を明らかにする。田辺において絶対の無ということが一個のリアルな事態であり得たのは、それが「行為的現在の瞬間」として理解されたからに他ならないが、この「行為的」という形容詞には、それが場所的ないしは自己限定的ではあり得ないという西田への批判が暗に含まれていると言える。

このような西田への対抗意識は、田辺が「種の論理」を提唱することにより顕在化する。ところが、初期の「種の論理」（「社会存在の論理」〔1934-35年〕、「種の論理と世界図式」〔1935年〕）においては、西田（およびハイデガー）の時間偏重の姿勢が問題視され、世界はあくまでも空間的なもの（すなわち種）との結合において捉えられるべきことが強く打ち

出される。この際に、絶対無という概念のリアリティーはどこに求められていたのか。このことを検討するのが、本発表のさらなる課題となる。

ただ、時間は空間と媒介されるべきことを強調するこの時期の立場は、田辺の思想全体から見ればむしろ例外的であって、その後の「種の論理」の展開の結果として、時間論は再び田辺の思想の中心的位置を占めることになる（「永遠・歴史・行為」〔1940年〕）。それに伴って、田辺の絶対無理解も大きく進展する。絶対無の還相という思想の提唱はそのことを端的に示すものに他ならない。これ以降西田の時間理解は空間的であるがゆえに不徹底であるとして批判されることになるが、還相という無の現われを説く田辺の立場はかつて拒否したはずの無の自己限定という西田の思想に近づいているように見える。しかも、「懺悔道」やキリスト教論を介して、絶対無の還相という考えは、「実存協同」という他者論ないしは共同体論的なふくらみを獲得することになるが、これも西田において「永遠の今の自己限定」が「私と汝」という問題とリンクしていたことに触れ合うかのように思われる。このような田辺の西田への“接近”はいかに理解されるべきなのか。時間論という観点からこのことを見定めるのが、本発表の最終的な課題となる。